



**Data**

監督・製作：ロブ・マーシャル  
 原案：P・L・トラヴァース『メリー・ポピンズ』(Mary Poppins)  
 出演：エミリー・ブラント/リン＝マニュエル・ミランダ/エミリー・モーティマー/ベン・ウィショー/ジュリー・ウォルターズ/コリン・ファース/メルル・ストリーブ/アンジェラ・ランズベリー

## 👁️👁️ みどころ

大学受験を控えた高校3年生なのに、私はジュリー・アンドリュース主演の『サウンド・オブ・ミュージック』(65年)とそれに続く『メリー・ポピンズ』(64年)に夢中になり、LPレコードに聴き入った。それから約55年、何とそのメリー・ポピンズがリターン!

前作から20年後のロンドンのチェリー通りに、傘を持ち風に乗ってリターンしてきたメリー・ポピンズを演じるのはエミリー・ブラント。前作のイメージとは異質だが、その能力は同じ。危機にあったバンクス家は彼女の力によってまたたく間に回復していくことに。

「余の辞書に不可能という言葉はない」はナポレオンの金言だが、メリー・ポピンズの座右の銘は「どんなことだって可能だ、不可能なことさえも」だ。さあ、バンクス家の幸せの復活は?

今ドキのヒット曲は難解なものが多いが、本作の歌のナンバーは新しさと共に懐かしさを呼び起こしてくれる名曲ぞろい。家族揃ってこんな名作を楽しみたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■ 55年ぶりにメリー・ポピンズに再会! ■

いやー、メリー・ポピンズが帰ってくるとは思わなかった。私がジュリー・アンドリュース主演のミュージカル『メリー・ポピンズ』(64年)を観たのは、高校3年生の時。『サウンド・オブ・ミュージック』(65年)を観てミュージカルの魅力にとりつかれた私は、大学の受験勉強もそこそこに、続く『メリー・ポピンズ』にも夢中になった。そして、『サ

ウンド・オブ・ミュージック』のLPに続いて『メリー・ポピンズ』のLPを購入し、その名曲に酔いしれたものだ。

あれから約55年、『メリー・ポピンズ リターンズ』でメリー・ポピンズを演じる女優はエミリー・ブラントだ。

## ■□■ 20年前の子供も今は大人！そこになぜ再度彼女が？ ■□■

メリー・ポピンズは、空からやってきて空に戻る魔法使い(?)。そして、前作で彼女にお世話になっていた子供時代のマイケル・バンクス(ベン・ウィショー)とジェーン・バンクス(エミリー・モーティマー)が本作の主人公だ。もっとも、映画は55年ぶりだが、相変わらずロンドンのチェリー通りに住む彼らを主人公とする本作の物語は“あれから20年後”の1934年だ。バンクス家の長男だったマイケルは今では子供3人の父親となり、父親や祖父が働いていたロンドンのフィデリティ銀行で臨時の仕事に就いていた。しかし、世の中は大恐慌時代の真っ最中。マイケルも金銭的な余裕がないうえ、1年前に妻を亡くしたばかりで家の中は荒れ放題だった。そんな窮地の中、追い打ちをかけるように銀行から融資の返済期限切れになったと通告され、このままでは家を失ってしまうピンチに。

そんな父親を双子の女の子アナベル(ピクシー・デイヴィス)と男の子ジョン(ナサナル・サレー)は密かに心配しつつ、末っ子のジョージ(ジョエル・ドーソン)の面倒を見ていたが、そんなある日、あの何をやっても完璧で真面目な乳母のメリー・ポピンズが右手に傘を持ち風に乗って再度彼らの目の前に舞い降りてくることに。こりゃ、一体なぜ・・・？

## ■□■ オープニング曲は？ “街灯の点灯夫” なる職業が今も！ ■□■

子供たちと一緒に、傘を持ち風に乗って下りてくるメリー・ポピンズを目撃したのは、ジャック(リン＝マニュエル＝ミランダ)。彼は今でも街灯の点灯夫の仕事をしているらしい。あれから20年後の1934年のロンドンになお“街灯の点灯夫”なる職業があることにビックリ！

それはともかく、冒頭に彼が自転車で街中の灯りを消しながら歌う曲「Underneath the Lovely London Sky」は、それを聴いているだけですぐに私をあの時代に運び込んでくれるすばらしいナンバーだ。本作では中盤にジャックとジャックの仲間たちがド派手なパフォーマンスを見せてくれる歌と踊りのナンバー「Trip a Little Light Fantastic」をはじめ計9曲のオリジナル曲が用意されているが、そのすべてが耳に馴染みが良く覚えやすいもの。近時のヒット曲はあまりにも難しいものが増えているが、本作のオリジナル曲はそうではなく、新しさと共に懐かしさも呼び起こしてくれる名曲ぞろいだ。

## ■□■ 凧あげの今は？カイトの夢は？ ■□■

中国の旧正月を祝う春節は、今では1億人の“民族大移動”を伴う大行事になっている。またそれは、日本にとっては莫大な金額のインバウンド消費を生む来日観光客への期待になっている。それに対して、日本の正月を祝う行事（風景）としての凧あげは今では全くなくなっている。しかし、1934年のロンドンを舞台とした本作では、子供たちにとって凧あげは大きな楽しみだったらしい。凧は英語では「KITE」だが、前作のナンバーの「Trip a Little Light Fantastic」はすばらしい曲だった。また、バブルの時代の1990年前後に私がよく歌っていた曲が「My Little Lover」の「白いカイト」。ことほど左様に、子供たちのみならず、いつの間にか子供から大人になってしまった大人だって、凧（カイト）にはさまざまな思い出が・・・。

そう考えると、家を明け渡さざるを得なくなったバンクス家が引っ越しに際して残っていた凧を「捨ててしまえと！」となったのは仕方ない。しかし、いったん捨ててしまったそのカイトには何と・・・。

メリー・ポピンズが糸の切れた凧の合間から登場してきたこととあわせて、本作では小道具（凧、カイト）の持つ意味をしっかりと考えたい。

## ■□■ 債務不履行に伴う担保権の実行をいかに阻止？ ■□■

本作は本来ウォルト・ディズニー制作の子供向けの童話。しかし、そこでのテーマは、乳母になったメリー・ポピンズが子供たちに教える「どんなことだって可能だ、不可能なことさえも」だ。これは一見ナポレオンの金言である「余の辞書に不可能という言葉はない」と同じようだが、実はかなり大きく違うはず・・・。

しかして、本作では童話とは思えない債務不履行やそれに伴う担保権の実行、家の明け渡しという法的流れの中、それを阻止する対抗手段として、バンクス家にあるはずの株券探しとその提出という現実的、法的テーマが浮上してくる。担保権が実行される前に株券を提出してローンを一括返済できればすべて解決だが、フィデリティ銀行の頭取ウィルキンズ（コリン・ファース）の悪巧みは、さて・・・？

『英国王のスピーチ』（10年）では見事にジョージ6世役を演じ（『シネマ 26』10頁）、『キングスマン：ゴールデン・サークル』（17年）（『シネマ 41』未掲載）では英国紳士として華麗なアクションを演じたコリン・ファースが、メリー・ポピンズの童話で悪役を演じるとは何とも意外だが、ラストでは前作でキーワードになった「2ペンス」が大きな威力を発揮するので、それにも注目！

## ■□■ 彼女の任務は？幸せが戻ると役割は終了？ ■□■

メリー・ポピンズは、“妖精”というにはちょっと歳をとりすぎているが、“魔法使い”

というほどおばあさんのイメージはない。まさに、右手に傘を持ち風に乗って地上に降りてくる姿がピッタリの“乳母”だ。そんな乳母としてのメリー・ポピンズ最大の能力は、魔法の力で不可能を可能にしてしまうことだが、何をやっても完璧で真面目なのが彼女の特徴。しかして、彼女があれから20年後の1934年の今、再びロンドンのチェリー通りに降り立ち、大人になったマイケル・バンクスの家で3人の子供たちの乳母に就任(就職?)したのは、一体何のため。単にミュージカル映画として楽しむだけでなく、本作の鑑賞についてはそのこともしっかり考える必要がある。

私が子供の頃に夢中になった漫画が、「赤銅鈴之助」と共に「月光仮面」。そのテーマソングは第26期司法修習8組の“クラスソング”になったほどだが、その歌詞で「どこの誰かは知らないけれど、誰もがみんな知っている。月光仮面のおじさんは正義の味方よ、よい人よ」と歌われた月光仮面は、「疾風のように現れて、疾風のように去って行く」ことになる。すると、フィデリティ銀行のローンに苦しむだけでなく、ウィルキンズ頭取の陰謀によって危うく自宅を失う危機にあったバンクスを助けるためにメリー・ポピンズがリターンしてきたとすれば、メリー・ポピンズも月光仮面と同じような「正義の味方よ、よい人よ」ということになる。

①思わぬところからの株券の発見、②ウィルキンズ頭取の悪巧みが露見したことによる父親への頭取の復権、③バンクスがかつて2ペンスを投資していたことの大きな成果。そんなストーリーを経て、自宅を巻き上げられることから免れたバンクス家は家族そろっての大団円となるが、そこでメリー・ポピンズの役割も終了?すると、その後は月光仮面と同じように、メリー・ポピンズも「疾風のように去って行く」だけだがその展開は・・・?

2019(平成31)年2月16日記